

パーリ語経典韻文中の「信仰」について

橋 本 哲 夫

(種智院大学)

‘faith’ 「信仰」は、Andersen の Glossary 内では、saddhā, pasanna, khanti, pasāda の訳語である。おなじく‘faithful’ 「信仰（心）のある」は saddha の訳語である。しかし、これらのパーリ語が、テキスト中で常に「信仰」または「信仰（心）のある」を意味しているわけではない。⁽¹⁾

特に、saddhā (saddha) に関して⁽³⁾は、「信仰」または「信仰（心）のある」と訳すことに不自然さを感じる個所がいくつかある。

本稿ではそれらの内のひとつである “saddhā dutiyā purisassa hoti” について考察する。

この語句は、テキスト内では、SN. vol. 1, p. 25, G と SN. vol. 1, p. 38, G に出現する。

dutiya は、テキスト内では、「同伴者」または「第2」の意味で使われている。⁽⁴⁾ 「同伴者」の場合、「いないほうが良い」のニュアンスを伴っている。⁽⁵⁾ 「第2」は、第1のものと対等な「第2」である（「第1のものに比べて劣った」という意味はない）。

ここでは、主語が「saddhā」で述語が「同伴者」である。saddhā が「信仰」を意味するのであるなら、「信仰は、（いないほうがよい）同伴者である」となり、不自然である。この場合、saddhā が「信仰」でないか、dutiya が、「（いてほしい）同伴者」のどちらかと考えねばならない。

SN. vol. 1, p. 38, G, SN. vol. 1, p. 25, G の順に考察する。

A) SN. vol. 1, p. 38, G の場合、いま仮に、saddhā が、「信仰」を意味するとした場合、仮訳は以下となる——（下線部は問題点）

saddhā dutiyā purisassa hoti // paññā c' enaṃ pasāsati // nibbānābhī-
rato macco // sabbadukkhā pamuccatī ti //// 信仰は人の（いてほしい）
同伴者である。明らかな智慧が彼を教え諭す。人は、安らぎ（ニルバー
ナ）を楽しんで、一切の苦しみから逃れる。（SN. vol. 1, p. 38, G.）

そして、このガーターの要旨は、「信仰が、智慧の遠因となって、人は、
一切の苦しみから逃れる」ということになるが、そのことは、他のいくつ
かのガーター⁽⁶⁾を組み合わせると認められるようである——

saddhāyāhaṃ pabbajito // agārasmā anagāriyaṃ // satipaññā ca
me buddhā // cittaṃ ca susamāhitaṃ // kāmaṃ karassu rūpāni //
n' eva mam vyādhayissasīti // // 信の心をもって、私は家を出て、
家無き（修行者の境地）に赴いた。我が正しい思いと智慧とは増大し
た。我が心はよく安定している。（悪魔よ）色々の姿を現すがよい。
しかし私を悩ますことは出来ないであろう。（SN. vol. 1, p. 120, G.=
Thag. 46）

maṃsacakkhussa uppādo maggo dibbassa cakkhuno / yato ñāṇaṃ
udapādi paññācakkhu anuttaraṃ / yassa cakkhussa paṭilābhā
sabbadukkhā pamuccatīti // 肉眼はやがて超人的な眼の生じる道で
あり、そこから智慧が生じる故に、それが最高の智慧の眼である。そ
の眼を得ることによって全ての苦しみから解放される。（Itivuttaka, p.
52, G.）

ところが、上記で、「智慧が、彼を教え諭す（paññā c' enaṃ pasāsati）」
と訳した部分の pasāsati⁽⁷⁾ は、テキスト内は勿論 Pāli Tipiṭakaṃ Concor-

dance に挙げられた用例でも、意味が「支配・統治する」であり、目的語は、非明示なものひとつを除いて全て「王国」「大地」等であり、人間ではない。(非明示なものも、前後から「王国」と推察される)。従って、enam を purisa とみなし、「彼」と訳すのは、自然ではない。enam を女性・単数・対格 (Geiger “A Pali Grammer” sec. 7.2) と解して、「それを」すなわち「saddhā」を「支配する、統治する」とするほうが自然である。ところが、そうすると訳は、「智慧が信仰を支配・統治する」となる。これはまた不自然である。

ここで、ノーマン博士によれば、saddhā (Skt. śraddhā) には、オールタナティブな意味として、「欲望 (desire)」があるそうである⁽⁸⁾。この saddhā をこの意味に解すると、「智慧が欲望を支配・統治する」となり、自然である。

従って、このガーターの始めの部分 saddhā dutiyā purisassa hoti の訳も、「欲望は、人の (いないほうがよい) 同伴者である」となる。ガーター全文の訳は以下のようなになる――

「欲望は人の (いないほうがよい) 同伴者である。明らかな智慧がそれを支配・統治する。人は、安らぎ (ニルバーナ) を楽しんで、一切の苦しみから逃れる。」

B) SN. vol. 1, p. 25, G. の場合、いま仮に、saddhā が、「信仰」を意味するとした場合、仮訳はこのようである―― (下線部は、問題点)

saddhā dutiyā purisassa hoti // no ce assaddhiyam avatiṭṭhati // yaso ca kitti ca tatvassa hoti // saggam ca so gacchanti sarīram pahāyā ti // // 信仰は人の (いてほしい) 同伴者である。もしも人に不信が残らないならば、彼には名声と名誉とが生じる。かれは身体を捨てた後に、天

に行く。(SN. vol. 1, p. 25, G.)

そして、このガーターの要旨は、「(仏などへの) 信仰が、人にあれば、その人には名声と名誉とが生じ、死後は、天に生まれる」ということとなる。そのことは、他のいくつかのガーターを組み合わせると一見認められるようである――

「名声と名誉が生じる」について：

aggato ve pasannānaṃ aggaṃ dhammaṃ vijānataṃ / agge buddhe pasannānaṃ dakkhiṇeyye anuttare // agge dhamme pasannānaṃ virāgūpasame sukhe / agge saṃghe pasannānaṃ puññaṃ kkhette anuttare // aggasmim dānaṃ dadataṃ aggaṃ puññaṃ pavaḍḍhati / aggaṃ āyu ca vaṇṇo ca yaso kitti sukhaṃ balaṃ // 真に最上の者を信仰し最上の教えを知り、無上の供養されるべきものである最上の仏を信仰し、貪りを離れて安らかな、安楽な、最上の教えを信仰し、最上の功德をもたらすところである最上の僧団を信仰し、最上のものに施しを施す人々には、最上の功德が増大し、最上の寿命と美貌と名声と名誉と幸福と力が増す。(Itivuttaka, pp. 88-89)

「死後は、天に生まれる」について：

ye dha laddhā manussattam // vadaññū vitamaccharā // buddhe pasannā dhamme ca // saṅghe tibbagāravā // ete sagge pakā-senti // yattha te upapajjare // sace enti manussattaṃ // aḍḍhe ajāyare kule // coḷaṃ piṇḍo ratī khiḍḍā // yatthākicchena labhāti // parasambhatesu bhogesu // vasavattiva modare // diṭṭhe dhamme sa vipāko // samparāye ca suggatitī // // この世で、人たる身を得て、気前よくわかち与え、ものおしみをしない人々が、仏陀と真理の教えに対して、信仰し、修行者の集いに対して熱烈な尊敬心

をもっているなら、彼等は天界に生まれて、そこで輝く。もしも人間の状態になっても、裕福な家に生まれる。そこでは、衣服食物、快樂、遊戯が勞せずして手にはいる。また（来世には）他人の蓄えた財物を他化自在天のように、喜び楽しむ。現世ではこの報いがあり、死後にはよいところに生まれる。（SN. vol. 1, pp. 34-35, G）

ところが、少し厳密に見ると、事情は異なる。

まず、ここでは「信仰」を表すのに、pasannaが使われており、saddhā⁽⁹⁾ではない。

pasannaとsaddhā⁽¹⁰⁾とは、同義と思われる部分と、異議と思われる部分⁽¹¹⁾とがある。同義である部分を重視すれば、saddhāは、「信仰」であり、dutiyaは「(いてほしい) 同伴者」である。しかし、その場合（A）と同じ矛盾が生じる。

一方、pasannaとsaddhāは同義ではない、と考えた場合、上記の要旨を援護する用例はテキスト内には全くない。すなわち、「名声と名誉 (yaso kitti)」をもたらしものにsaddhā⁽¹²⁾はない。また、「天に行く (saggam gacchati)」ことの原因にsaddhā⁽¹³⁾はない。つまり、saddhāを「信仰」と解する限り、それと「名声と名誉」、「天に行く」の間には、まったくつながりがなく、同一のガーター内で、続けて書かれる必然性がないということである。従って、saddhāは「信仰」以外のものと考えねばならない。また、続くno ce assaddhiyam avatiṭṭhatiのassaddhiyaも「信仰の否定」以外の意味に解されねばならない。

では、そのno ce assaddhiyam avatiṭṭhatiは、どう訳されるべきか？ no ce assaddhiyam avatiṭṭhatiは、「名声と名誉」、「天に行く」の原因・理由である。「天に行く (saggam gacchati)」の原因は、テキスト中では他には、「園に植え、林に植え、橋を作り、井戸の家や、貯水池を作る、

息所を与える」行為 (SN. vol. 1, p. 33, G.), 「施し物を受けるに適した多くの人に食べ物を施し, 施し物をささげる」行為 (Itivuttaka p. 19, G.), 「ものおしみをしない, 他に分け与える」行為 (Itivuttaka p. 19, G.) の3例がある。共通して, 「ものおしみをしないで, 与えること」の重要性が言われている。⁽¹⁴⁾

ここで, assaddhiya は assaddha から作られた抽象名詞である。assaddha はテキスト内での5回の出現中3回 (SN. vol. 1, p. 96, G に2回, Sn. 663), 「吝嗇な (macchari)」「ものおしみする (kadariya)」と並べて, 劣悪人の形容に使われている。さらに Sn. 663の assaddha にノーマン博士は, Köhler が saddhā に与えた意味に言及して, 「ungenerous (狭量な)」という訳語を与えている。⁽¹⁵⁾

以上の諸事実を考え合わせると, no ce assaddhiyam avatiṭṭhati は, 「狭量さが残っていないならば」と訳すべきである。

翻って, saddhā dutiyā purisassa hoti の訳を考えると, ノーマン博士によれば, saddhā には, 二者択一的意味として, 「欲望 (desire)」があるそうである。⁽¹⁶⁾ この saddhā をこの意味に近づけて解すると, 「欲望は, 人の (いないほうがよい) 同伴者である」となり, 「(しかし) 狭量さが残っていないならば」と自然に繋がる。

ゲーター全文の訳は以下のようなになる——

欲望は人の (いないほうがよい) 同伴者である。(しかし) 狭量さが残っていないならば, 彼には名声と名誉とが生じる。かれは身体を捨てた後に, 天に行く。

このように, saddhā dutiyā purisassa hoti の saddhā は, 「欲望 (desire)」と訳されるべきである。

注

- (1) SN. vol. 1, Suttanipāta, Udāna, Itivuttaka のガーター, および Theragāthā, Therīgāthā, Dhammapada.
- (2) ノーマン博士は, Sn. 371 の saddha を believer, Sn. 663 の assaddha を ungenerous, Sn. 853 の saddha を impassioned, Thag. 240 の assaddha を unbelieving と訳し, さらに Sn. 1146 に対する注記中では, saddhā に alternative な意味として 'desire' の意味のあることを記し, Dh. 97 の assaddha の意味に 'with desire got rid of', 'without desire' がある可能性を示し, さらに pamuñcantu saddham の訳に 'give up their desire' がある可能性を記している (K. R. Norman "The Group of Discourses" 2001, PTS. pp. 428-429)。また, Thig. 43, 69 の saddhāyika を fit-to-be-trusted と訳している。一方, pasanna を faith と訳すことはない。ただし, pasidati を have faith と訳すことはある (Sn. 563, Thag. 673, 833)。また, ノーマン博士は, Thig. 452 の saddā を asaddha として, 'without faith' の訳語を与えているが, ここでは, 採用しない。また, Sn. 766 の addhā には v. l. として saddhā があるとする見解に言及し, 否定しているが, この点はノーマン博士に従う (K. R. Norman "The Group of Discourses" PTS. 2001, p. 323)。また, Sn. 559=Thag. 829 の adhimuccassu を 'have faith' と訳している。* pamuñcantu saddham に関しては, 中村元, 中村元選集決定版『ゴータマ・ブツダ I』春秋社 1992年, pp. 462-423, 村上真完「『信を發こせ』再考——pamuñcantu saddham——」(『仏教研究』22号, 平成5年3月) に詳しい。
- (3) 動詞 saddahati とその現在分詞 saddahāna および abhisaddahati の現在分詞 abhisaddahant については, saddhā (saddha) とは区別して扱う。
- (4) dutiya は, 「第1」を意味する語が伴われている場合は, 「第2」の意味となり, そうでない場合は, 「同伴者」の意味となる。SN. vol. 1, p. 131, G. の dutiya は, 「第1」を意味する語が伴われていないが, tādisikā が「第1」の意味を表していると考え, 「第2」を意味していると考え。また, 同様に Thag. 97 (=Thag. 862) の dutiya は「第1」を意味する語が伴われていないが, 注釈により「第2」の意味である (Theragāthā-Aṭṭhakatā, vol. 1, p. 213)。さらに, Thig. 420 の dutiya も「第1」を意味する語が伴われていないが, 注釈により「第2」の意味である (Therīgāthā-Aṭṭhakatā, p. 247)。
- (5) 同伴者 = 「悟りの邪魔もの」(Thag. 54, 541, 896, 1091)。同伴者 = 「いさかいと饒舌の原因」(Sn. 49)。同伴者 = 「妄執」(taṇhā, Sn. 740; Itivuttaka, p. 9, G, p. 109, G. ここでは, saddhā は taṇhā の類義語である。)。同伴者 =

「(悪魔からすれば) 誘惑の邪魔者」(Thig. 230)。

- (6) *vijja* と *pahassatha* (= *pajahissatha*, comm.) を用いて、1 ガーターでほぼ同義のものがある——*saddhāya silena ca viriyena ca samādhinā dhammavinicchayena ca sampannavijjācaraṇā patissatā pahassatha dukkham idaṃ anappakaṃ* 鞭を与えられた良い馬のように勢いよく努めよ。信仰により、戒めにより、励みにより、精神統一により、真理を確かに知ることにより、智慧と行いとを完成した人々は、思念を凝らし、この少なからぬ苦しみを除け。(Dhp. 144)
- (7) *pasāsati*=to teach, to instruct, to rule, to reign, to govern, PTSD. ただし、注釈によれば、*pasāsati* は *anusāsati* とされる (*Sāratthappakāsini* p. 94)。また *dutiya* は *sugatiṃ c’eva nibbānaṃ ca gacchantassa dutiyikā* 「よいところ、ニルヴァーナへ行くための同伴者 (f.)」とされる (*Sāratthappakāsini* p. 94) ことから、注釈者は、*saddhā* は「信仰」とのみ解していたようである。*anusāsati* には、少ないが、「統治する」の意味がある (SN. vol. 1, p. 86, G, Sn. 1002, Thag. 914の3例)が、「信仰」が主語であるとしてゐる以上、「智慧が、彼を教え・諭す」とするのが自然である。comm——*kissa cābhirato ti, kismim abhirato. dutiyā ti, sugatiṃ c’eva nibbānaṃ ca gacchantassa dutiyikā. paññā c’enaṃ pasāsati ti, paññā etaṃ purisaṃ ‘idaṃ karohidan mā karī’ ti anusāsati.* (*Sāratthappakāsini* p. 94)
- (8) It is likely, then, that *saddha* here reflects the alternative sense of *śraddhā* “desire” (see Hans-Werkin Köhler, “Śraddhā in der vedischen und altbuddhistischen Literatur”, Wiesbaden, 1973, p. 60 and K. R. Norman, “Dhammapada 97: a misunderstood paradox”, *Indological Taurinensia*, VII, pp. 325-31 (=Collected Papers II, pp. 187-93) 1979, p. 329), and would therefore mean “desiring”. K. R. Norman “The Group of Discourses” PTS. 2001, p. 355. ad. Sn. 853, and see. p. 428. ad Sn. 1146.
- (9) *gārava* は、「同僚に対する尊敬 (心)」の意味である。
- (10) 仏、法、僧を対象として、順に、*saddhā*・*saddhā*・*tibbagārava* (Thig. 286) と *pasanna*・*pasanna*・*tibbagārava* (SN. vol. 1, p. 34, G.) のセットがある。また、*saddhā* と *pasanna* はともに仏、法、僧を対象とする (SN. vol. 1, p. 102, G., *Itivuttaka*, p. 88)。また、Dhp. 249では、*yathāsaddhaṃ* と *yathāpasādanaṃ* とが並んで書かれている。また SN. vol. 1, p. 32, 57, 58 では、*saddhā* と *vipprasanna-cetas* とが平行語 (言い換え) と考えられる。
- (11) *pasanna* が *citta*, *netta* とコンパウンドになるのに対して *saddhā* はコンパウンドにならない。*pasanna* が目的語を持つことが多いのに対して *sad-*

dhā は目的語を持つのが珍しい。pasanna が「出家」の原因とはならないのに対して saddhā は「出家」の原因となる。pasanna が tathāgata を信仰の対象としないのに対し、saddhā は tathāgata を対象とする。pasanna は、特定の個人（ブラフマ・デーヴァ）を対象とする（SN. vol. 1, p. 142, G.）。

- (12) パーリ經典韻文中、ここ (Itivuttaka, p. 88-9) 以外で、yaso (名声) と kitti (名誉) をもたらすものは、「不死に到達するために、正しいまっすぐな、八つの仕方よりなる、尊い道（八正道）を実践する人は、安樂を求めてそれを実践するので、幸せを得、名誉を獲得し、彼の名声は増大する」（Thag. 35）と言われるが、「尊い道（八正道）」には「信仰（のある）(saddhā, saddha)」は含まれていない。また「ゆっくりしてよいときにゆっくりし、急がねばならぬときに急ぐ賢者は——名声と名誉とを獲得し、友人達とも仲たがいない」（Thag. 293-4）と言われる。さらに、「名声と名誉」を失うのは、「淫欲の交わり (methuna)」をするからであるとも言われる（Sn. 817）。yaso だけに言及している場合、その原因については、「心は奮い立ち、思いつつましく、行いは清く、気をつけて行動し、自ら制し、法に従って生き、努め励む人は、名声が高まる」（Dhp. 24）と言われる。kitti だけに言及している場合、その原因については、「行動規範 (sila) を守る人は、常に名声と名誉と称賛とを得る」（Thag. 611）と言われ、「行動規範 (sila) を行うことによく専念している慎重な人は、この世で名誉を得、また死後に天界 (sagga) で楽しむ。かれは至るところで楽しむのである」（Thag. 618）と言われ、「修行僧は、正しく実践して、いかなる時にも悲しまず、名誉と幸せとを享受する」（Thag. 1221; SN. vol. 1, p. 187, G.）といわれ、「（ひとは）誠実を尽くして名誉を得る」（Sn. 187; SN. vol. 1, p. 214, G.）といわれ、また「智慧 (paññā) は名誉 (kitti) と名声 (siloka) とを増大する」（Thag. 551）と言われる。

このように「yaso (名声) と kitti (名誉) をもたらすもの」の内に saddhā (saddha) は無い。また、上記の諸用例と文脈上繋がっている前後のガーター内にもない。(Dhp. 303には、saddho と yasobhogasamappito が見られるが、これらは、silena sampanno とともに、ある個人の形容に使っているのであり、相互に因果関係がないと考える)。

- (13) 「天に行く (saggaṃ gacchati)」の原因は、ここ以外には、「園に植え、林に植え、橋を作り、井戸の家や、貯水池を作る、休息所を与える」行為 (SN. vol. 1, p. 33, G.)、「施し物を受けるに適した多くの人に食べ物や施し、施し物をささげる」行為 (Itivuttaka p. 19, G.)、「ものおしみをしない、他に分け与える」行為 (Itivuttaka p. 19, G.) の 3 例のみである。「天

(sagga) に行く」を「天(sagga)に生まれる(gacchati, uppajjati, upeti, etc.)」と広く解した場合でも、その原因としては、「身の悪い行いを捨て、また、口の悪い行いを捨て、心の悪い行いを捨て、なお、その他の悪いといわれる行いも捨て、不善の行いをなさず、多くの善を行う」(Itivuttaka p. 55, G. ; p. 25, G.) こと、「よい行動規範(sīla)と、よい見解(diṭṭhi)と、これらの二つのことを備えている」(Itivuttaka p. 27, G.) こと、「正しい心を持ち、正しい言葉を語り、身体で正しい行いをし、……この世の短い生涯に、知識多く、功徳をなす」(Itivuttaka p. 60, G.) こと、「行いのよい」(Dhp. 126) こと、「福徳(puñña)を生じる行いに務め励む」(SN. vol. 1, p. 87, G.) こと、「繰り返し施しを行う」(SN. vol. 1, p. 174, G.; Thag. 532) こと、「行動規範(sīla)を守る」(Thag. 609) こと、「富を得たならば、自ら用い、またなすべきことをなす。……親族の仲間を養う」(SN. vol. 1, p. 91, G.) こと、「(財を)受容し、かつ人に与えよ。能力に応じて与え、かつ受容」(SN. vol. 1, p. 32, G.) すること、「善人」(SN. vol. 1, p. 19, G.) であること、「行動規範を行うことによく専念」(Thag. 618) すること、「この世で、人たる身を得て、気前よくわかち与え、ものおしみをしない人々が、仏陀と真理の教えに対して、尊敬心(pasanna)あり、修行者の集いに対して熱烈な尊重心(tibbagāra)をもっている」(SN. vol. 1, p. 34, G.) こと、「両親に対する奉仕」(Itivuttaka p. 111, G.; SN. vol. 1, p. 182, G.), 「身体により、言葉により、心による、法にかなった行いをなす」(SN. vol. 1, p. 102, G.) ことが挙げられている。(SN. vol. 1, p. 102, G.は、直前に「賢者は、仏・法・僧に対する信仰を安住させよ(buddhe dhamme ca saṅge ca, dhiro saddham nivesaye)」とあるが、文脈上、繋がっていないと考える)。このように「天(sagga)に生まれる」原因の内に「信仰(saddhā, saddha)」は無い。また、上記の諸用例と文脈上繋がっている前後のガーター内にも、「信仰(saddhā, saddha)」との繋がりは無い。(ただし、「天」をsaggaに限らなければ、SN. vol. 1, p. 96, G. では、saddhaがtidiva-ṭhānaに生まれることの原因のひとつとなっている。さらに、「信仰」をsaddhāとsaddhaに限らなければ、Itivuttaka, p. 112では、saddahānaがdevalokaで楽しむことの原因となっている。また、SN. vol. 1, p. 20, G. ではsaddahānaがparatthaで快いことの原因となっている。* Dhp. 177ではdevaloka, paratthaは、「物惜しみをしない」「分かち合う」ことで到達されるとあることから、「信仰」と「布施」との繋がりが予想される。)

- (14) 「うまれる」の動詞をgacchatiに限定した場合、この3例のみであるが、upapajjati, upeti等のgacchati以外の動詞を範囲に入れても、同様に、「繰

り返し施しを行う」(SN. vol. 1, p. 174, G.; Thag. 532) こと, 「富を得たならば, 自ら用い, またなすべきことをなす。……親族の仲間を養う」(SN. vol. 1, p. 91, G.) こと, 「(財を) 受容し, かつ人に与えよ。能力に応じて与え, かつ受容」(SN. vol. 1, p. 32, G.) すること, 「この世で, 人たる身を得て, 気前よくわかち与え, ものおしみをしない人々が, 仏陀と真理の教えに対して, 尊敬心 (pasanna) あり, 修行者の集いに対して熱烈な尊重心 (tibbagāraṇa) をもっている」(SN. vol. 1, p. 34, G.) こと, 「母または父を, ことわりに従って養うその奉仕」(SN. vol. 1, p. 182, G.) をすること, 「両親に対する奉仕」(Itivuttaka p. 111, G.) をすることが, 「天に生まれる」の原因とされており, 「ものおしみをしないで, 与えること」の重要性が言われている。

(15) The Groupe of Discourses 2nd ed. PTS. 2001, p. 87, p. 293.

(16) =注(8)。

